



# 堆星

井上雅英

## 夜色の帽子

---

日も少しのびた

カーテンの裾に届かぬ

歩みはせめてポストまで

往来のあかしの麦茶を買い

日が閉じるのに合わせ

被る帽子に隠れながら

星空に戻る

## 平坦な星

---

連星の赤い点光

弱いほうの伴星は俺

月の余波からは逃げ出すも

草の隙間風からは脱しきれず

視力も落ちる一方の

暗闇でぶつ切りに青空文庫を読み

たまに電柱に手をついてはまた

この夜を仰ぐ

強いほうの彼方に息切れ

見えなくなった太陽の裏側を覗む

## ピーターラビット

---

丸いベンチの斜め上に兎がいて

ガラスの中の俺は電飾に佇み

気温も体温もない木陰にただ

スポーツ新聞の匂いの風に吹かれ

時間の過ぎる音なき音に耳を澄ませ

緑色の葉群れに目を塞いだ

## 枝葉の心

---

例えばヘンゼルとグレーテルなら

お菓子の家のことよりも

悪い親に捨てられゆく森道の暗がりや

浦島太郎ならば地上三百年の老婆の空白に

思いはせるは伏流猛々しき人の心底か

戻り難き童心に今更なにもものも動かず

花々を見やる日陰の枝葉に擬態し

静かなる休日を願う

## 小鳥居近縁

---

曇り空のタイミングと

四辺形の高層下テラス

鳩は近寄らずにうろつき

コーヒーの微風は肌寒くも

冬はまだ遠い午前

大池までの歩程に思いはせ

空気のように夢想の鳥居を

幾つか数え

時間をこえて前へと指先を

ちからなく伸ばしきった

## 無題

---

ガード下で透明な石を拾う

子供用の玩具の破片

秋の弱い風にさらされ

静かに震える

向こうに見えた淡い彼岸

アルミの反射に素顔は映らぬ

やがて線路の音に吸い込まれて

時間の目線を失った

## 長雨の死

---

社屋裏の向日葵が長雨に縮み萎ごと死んでしまい

プランターの朝顔も長雨に根腐り蕾のまま変死してしまった

今更晴れ上がり例え土ごと光に復活しようと

咲かじ悲哀はとどまらず

ただもう草木生に申し訳が立たず

金輪際鉢植えの牢獄にやらないと誓う

## 雪下の野営

---

ミゾレ落ちる闇の家路

歩道橋の登りに力む足

逆走の他人に舌打ちを

かすれた鼻歌は早春賦

待つ人を忘れ

待たせた事を忘れ

零時工場の薄灯る慟哭

誰にも知られぬ咳払い

## 冬眼

---

人工の段丘より貯水池をのぞみ

鴨の類の群れに口笛を

枯葉の堆積に凍えるポケットに力を

体力を蓄えよと真冬が語り

漂白の太陽に細めた眼を焼き付けて

乳幼児だらけの芝生を後にする

子どものままに大人になればと

ウンテイに首を傾げる犬のごとく

ゆっくりと歩く堤内

町は何時でも未来も過去もなしに

夢見続ける光

## 羊の夢が終わる時

---

フィナンシェのボートに乗り

羊の国へたどり着く頃

その夢は終わります

つきあたりのベンチで

いつまでもいつまでも

同じ時間を待ち続けます

## 後記と奥付

---

初出（古利根川海流より）

「夜色の帽子」（2016/1/16）

「平坦な星」（2015/6/30）

「ピーターラビット」（2015/11/24）

「枝葉の心」（2015/5/3）

「小鳥居近縁」（2015/11/23）

「無題」（2015/9/20）

「長雨の死」（2015/7/13）

「雪下の野営」（2015/2/6）

「冬眠」（2014/12/28）

「羊の夢が終わる時」（2015/12/9）

---

あとがき

思いもよらぬ大病を昨年患い、今一度自分の中の言葉の一つ一つを認識し直す機会を得たと思うことで、これからも少しでも積み重ねていければと思います。

（2016.1.17）

---

## 堆星

<http://p.booklog.jp/book/104241>

著者：井上雅英

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tkmuchzw411/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104241>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104241>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

